

- (11) J. J. La Grauge (1962): Notes on the sea surface temperatures, between Cape Town and Norway Station. Dec. 1960 - Jan. 1961. Notos, Vol. 10, No. 1 - 4.

### 3. 第 2 回鯨漁場座談会 ( 専門分科会 )

( 鯨研座談会の形式で開催 )

日 時 昭和 37 年 7 月 23 日 午後 1 時 30 分 ~ 5 時

場 所 日本水産株式会社本社会議室

司 会 奈 須 敬 二 ( 鯨 研 )

宇田道隆氏：シオメ、シオザカイと鯨漁場報告。

斎藤泰一氏：水温分布よりの上昇流、下降流推定報告。

小副川十郎氏 ( 日水 ) : 風向 ( 10 ~ 14 日平均 ) と等温線は若干関連あるようだ。10 m 層水温 2 時間おき測定 ( 3 時、5、7、9、11、13 時…… ) 電報で集め、10 隻母船で 1 日 100 点南氷洋鯨漁場で、毎日の等水温線を描くが、2 ~ 3 日もたつと合わなくなる。2 ~ 3 日おきに等温線を重ね合せてみると、西風、東風の入れかわりで海況に大変化が起る。シケ後 12 時間 ~ 24 時間たつと、大体のパターンは元へもどる。

冰山、マツコウ鯨年々変動あるが、似通った傾向はある。バンクも影響する。

根本敬久氏（鯨研）：南氷洋200m以浅の *Euphausia superba* 浮上群はあまり鉛直移動しない。「浮きエサ」、「底エサ」という。

一般に晴天10m深、曇天50~200m深、産卵時500~750m深、ひる間150m深、運動速くて定量的採集むづかしい。

飯田陸之助氏（極洋）：三陸沖ニタリ鯨のエサはカタクチ（50m以浅）、*Euphausia pacifica*、夜間5m以浅になる。1日に船が25~50マイルも流される。

小副川氏（日水）：こうした会合でデータを出し、シオメの形、南北移動の予報の研究など進めるとよい。シオメ近くの鯨は足速くとりにくい。「ヨドミ」をねらう。

岡崎義郎氏：アフリカ南22°E, 53°~54°SあたりのNW~SEに走るシオメに鯨が密集して53頭大漁した。

飯田陸之助氏：だがシオメ附近のクジラはとりにくい。金華山 E/S 300マイル沖のシオメ、そこしかイワシ鯨がない。北方系イワシ鯨だけ。カツオ群一ぱいた金華山 E<sup>5</sup>/S 290~280マイルのシオメの北側に北方系イワシ鯨、南側南方系イワシ鯨。幅広いシオメ。チカタイワシ（北方系）もある。

石野 誠（水大）：鯨漁場以前は、パツクアイス浴いに形成されていたが、最近は暴風圏によって形成されている。しかしこの30年間に海況に大変化あつたと考えられない。

中冷水、中暖水の深さ、値、時期は余り変化していないから。湧昇は海底地形によるが、ウェツデル海では低緯度でおこる。

インド洋側では大陸に近づく。太平洋側では余り沖合に湧昇出て来ていない。冬夏でUpwelling ちがうだろう。偏西風域暴風圏操業15°~3°Cの水溫（20°E中心漁場）。知能高い鯨が北方逃避？南極収束線は水溫4°~

5℃から2°～3℃に急降するあたりの現象だが、詳しく解析したい。

大村秀雄氏（鯨研）：5年周期説を前に出したが漁場が北遷してあてはまらなくなった。気象が海況に変化を起すのと別のファクター？ クジラのエサの絶対量とクジラの絶対量の問題ではなからうか？

奈須氏（鯨研）：1952～'61年北鯨サガス報告。

平野敏行氏（水研）：北洋海況調査報告。

3.4.0‰、3.7.5℃面地形図とその変化。基本パターンから予察、週間又は旬間天気予報を加味する。冬のアリューシャン・ベーリング冷えて年々変化する。アリューシャン大低気圧、シベリヤ大高気圧の basic pattern が関係する。

間庭愛信氏（漁船研）：DSL. シオメの超音波探知可能、探鯨に深さ、パワー、周波数かえる（200KC）.  $f$  ますと減衰ふえる。集群量  $\sqrt{N}$  に比例した反響。記録紙上の濃淡反射音像で、ざっとした量の目安になる。

以上のようにして談話を終り、協議、すこぶる有益であるから、部会ができれば船団側から資料を提供してもよいとの申し出があり、奈須氏（鯨研）が幹事役として案をねって、次回会合に提出、来る漁期の調査に役立てようということになった。また鯨漁場観測手引の草案作成も希望された。

（宇田道隆記）